



JICA海外協力隊の栄養士として熱い思いを胸にケニアの地方に赴任して約1年。ケニア人のポレポレ（ゆっくり、のんびり）が自分にもなじんで「まあいいか」と良い意味で適当に

JICA
だより



ケニア

金平恵実さん(45)

岩国市在住

発熱の訴え 悔い消えず

食事指導。母親たちは、下手なスワヒリ語で話す私のアドバイスを一生懸命に聞いて、自分なりに改善の努力をしている。ある日、診療所に再来院してきた20歳の母親が「4日前から赤

やんが熱を出している」と言うので、その日は食事指導なしで診療だけ済ませ、また来週ね、と別れた。

次の週、その親子は来なかった。その母親は毎週必ず来院していたが、いつも

えー？ なんで！？ 状況がのび込みめない私におぼちゃん（9カ月だろうと9歳だろうと人は死ぬんだ）今も忘れられない。

力を抜けるようになっていた。村の診療所で、低栄養のリスクがある赤ちゃんの母親に、母子手帳を見ながら



食事指導の様子

んに様子を聞きに行った。一緒に家庭訪問してほしいと話す「あの赤ちゃんなら死んだよ。あしたがお葬式だって」との返事だった。

一緒に家庭訪問してほしいと話す「あの赤ちゃんなら死んだよ。あしたがお葬式だって」との返事だった。

無表情で感情表現がなく、特に気になる母親だった。その親子の家の近くに住む仲良しのおばちゃん親は平静ではなかった。9カ月の赤ちゃんが愛されていたことを知り、安心したと同時に、私をもっと悔しさが込み上げてくる。最初に熱があると聞いた時点で「そうなんだ」と受け入れてしまったことが帰国した今も忘れられない。